

# 天賦源

石川 幹子

いしかわ みきこ

東京大学大学院工学系研究科 教授

## 1. はじめに

「**天**賦源(てんぷげん)」とは、天が与え賜うた肥沃の地を意味する。

中国四川省の成都平原は、かつて、諸葛孔明が「沃野千里、天賦之土」と称えた地である。2008年5月12日に発生した、マグニチュード8.0の汶川大地震は、この天賦源を涵養する龍門山麓を震源地とし、死者・行方不明者8万人に及ぶ、未曾有の災害となった。被災の実態、砂防関係者の尽力については、この間、SABO誌でも特集が組まれ、国際的協力、支援が行われてきた。

筆者は、現地政府が、震災直後に公募した「震災復興ランドデザイン」の策定に、この間、協力・支援をしてきており、安全なまちへの復興の歩みについて、紹介をしたいと思う。

震源地・映秀は、龍門山脈の懷に抱かれた町であったが、いまだに、ほぼ壊滅状況にある。急峻な山並みを縫うようにして南下してきた岷江が、成都平原に没する要の扇状地に形成された都市が、都江堰である。豊かな岷江の水は、ここで取水され、2000年の長きに渡り、四川盆地を潤してきた。網の目のように張り巡らされた水路網は、世界遺産に登録されており、パンダの生息地である龍門山麓の自然遺

産と合わせて、二重指定の世界遺産都市であった。

被災直後の2008年5月30日、成都市人民政府は、国際社会に速やかな復興の道筋を考えるために、都江堰・復興ランドデザインの公募を行った。

世界から47のチームがこれに応じ、10チームがノミネートされ、7月15日までの短期間に、復興計画の策定を行った。日本からは、東京大学と慶應義塾大学の協働チームが選ばれ、現地の西南交通大学と協力をし、復興ビジョンの策定を行った。

## 2. 復興の基本的考え方

**復**興に向けて、私たちが、すべてに優先し、基本としたものが、「被災者の方々の一日も早い暮らしの回復と、希望と勇気を喚起する」だった。同時に、私たちは日本における、過去の数多くの地震災害の経験を踏まえて、「短期的にやるべきことと、長期的な街の復興は車の両輪」であり、非常時にこそ、大きなビジョンが必要であることを、この復興ランドデザインの中で提示したいと考えた。

私たちは、詳細な現地調査、航空写真の解読、データ分析を行い、戸別のデータを立ち上げ、被災状況の把握を行った。都市・農村の都市構造、土地利用、緑地調査などを踏まえて、2300年にわたり形成されてきた水路網を基盤とする歴史的・文化的風土を、復興に向けた拠り所とすることで、皆が一致した。都江堰は、チベットへと続く高原文明と農耕文明の交差する歴史的都市であり、さらには、道教の発祥の地としての聖地でもある。網の目のように張り巡らされた水路が、細やかな地形の襞となり、優れた都市・農村景観を形づくっていることを、見



都江堰、宝瓶口：2000年にわたり継承されてきた水路網の取水口  
ここより取水された水が四川平野を潤す



天賦源田園風光帯計画：細かな水路網“林盤”を生かした新農村計画

出したことは、重要な出発点となった。世界10カ国のチームのうち、この視点を復興グランドデザインの基本に据えたのは、日本と台湾のチームだけであった。多くの案は、既存の農地を潰し、新都市をつくり、企業を誘致し、経済活性化を目指すものであった。地震の経験のない、アメリカ、ヨーロッパ諸国にしてみれば、復興という概念自体を、どのように都市計画に反映させるべきか、理解を超えた出来事だったのかもしれない、今になって考えている。

### 3. 世界遺産・生態都市

上記の基本的考え方を、現実の復興計画としていくために、私たちは、詳細な緑地計画とコミュニティの提案を行った。これは、日本においても、関東大震災と戦災復興計画の基本が、緑地計画の策定にあり、この非常時の計画が、今日の都市の繁栄を底辺から支えていることに、学んだも

のであった。都江堰市における地区ごとの特性にあわせて、私たちは、「水の都の社区」の提案を行った。また、網の目のように張り巡らされた水路網は、今回の地震でも、ほとんど無傷であり、倒壊した市街地の再生にあたっては、この水路網沿いに緑地を配置し、人びとの交流と、都市の自然環境の形成、風の道の軸とする提案を行った。特に、経済格差が厳然として存在する農村部については、現在の景観の特性を活かし、グリーン・ツーリズムを活用した再生計画の提案を行った。

この提案の背景には、自動車交通の発達により、中国の都市は、急速な拡大の波に見舞われており、地球環境問題が顕在化しているなかで、日本やアメリカの都市が歩んできたような拡大型都市計画からの、大きな転換が必要とされているという根源的課題が横たわっている。いわゆる低炭素化社会、コンパクト都市の実現である。

### 4. 復興への道のり

爾来、中国との往復が始まった。私たちの様々の提案のなかで、大きくとりあげられているのが、「世界遺産・生態都市」の考え方であり、水と緑の基盤を形成し、復興のグランドデザインとする考え方は、日本に学ぶという評語のもとに、他の都市にも適用されている。なかでも、農村計画の反響は大きく、現在200にのぼるプロジェクトが始動している。都市の拡大という巨大な時代の波の前に、どれほどの力がありうるか、不明ではあるが、しかし、既存の農村の文化的価値、そのものに新しい光が照射されたことは、一つの大きな希望である。

先人の知恵が生み出した天賦源の考え方に立ち返り、不幸な出来事を梃子として、「新天賦源」の創造に、協力をしていきたいと考えている。